

スピーチ場面における社交不安者の注意が不安に及ぼす影響

松本 美涼・藤原 裕弥・尾形 明子

The influence of attentional bias of social anxiety on anxiety in public speaking situations

Misuzu Matsumoto and Yuya Fujihara and Akiko Ogata

The current study sought to investigate the relationship between the focus of attention and state anxiety during a public speaking situation involving social anxiety. In a preliminary investigation, undergraduate students responded to a questionnaire based on the Two-dimensional Social Phobic Tendency and Narcissistic Personality Scale-Short version (TENS-S). A previous study using the TENS-S suggested that social anxiety could be divided into two subtypes (high anthropophobic tendency and high narcissistic personality, or high anthropophobic tendency and low narcissistic personality). The high anthropophobic tendency and high narcissistic personality group (HH group) was predicted to exhibit increased anxiety with self-focused attention and other-focused attention. The high anthropophobic tendency and low narcissistic personality group (HL group) was predicted to exhibit increased anxiety with other-focused attention. After screening, 30 undergraduate students were divided into one of three groups based on their questionnaire scores; HH group (n = 8), HL group (n = 9), and low social anxiety group (n = 12). Participants were asked to undertake a speech task to increase state anxiety. Following the speech task, participants rated the direction of changes in attention and the level of state anxiety. The results indicated that self-focused attention and other-focused attention were facilitated in public speaking situations.

キーワード : social anxiety, self-focused attention, other-focused attention, narcissistic personality

問 題

学校や職場において、人前で話す機会が多い。そのような時に、聴衆の反応、特に表情やしぐさが気になったり、手が震えているような気がしたり、顔が赤くなっているような気がして不安になることがあるだろう。このような、社会的場面で感じる不安は、社交不安と呼ばれ、“他者によって注視されるかもしれない社会的状況に関する著明または強烈的な恐怖または不安”と定義される (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)。これまで、社交不安者の情報処理に着目した研究が多く行われ、社交不安者は、社会的場面に対する解釈の歪みや注意の偏りが特徴的

であることが指摘されている。

社交不安者の注意の偏りは、自己注目と他者注目の観点から説明されてきた。自己注目とは、心臓がドキドキしているなど自身の身体感覚や、他者からどのように自分自身が見えているのか他者の視点から自分自身を観察することに注意を割いている状態ある。一方で、他者注目は、他者のしぐさや表情などに否定的な反応を検出することに注意を割いている状態である。そして、Rapee & Heimberg (1997) と Clark & Wells (1995) は社交不安者と注意の偏りに関係性について以下のように指摘している。まず、Rapee & Heimberg (1997) は、社交不安者は、社会的場面に直面した時、自己注目と他者注目が生じている状態となり、不安が生じるとしている。一方で、Clark & Wells (1995) は、社交不安者が社会的状況に直面した時、自己注目が生じている状態となり、不安が生じるとし、他者注目は重視していない。Clark & Wells (1995) と Rapee & Heimberg (1997) は、社交不安者の自己注目に重きを置いている点は共通している。しかし、Rapee & Heimberg (1997) は、社交不安者の不安は、自己注目に加えて、他者注目によって不安が生じることを想定しているという点で Clark & Wells (1995) と異なる。

Perowne & Mansell (2002) と河崎・高島・岩永 (2009) は、両者の主張の矛盾に着目し、他者が存在する現実に近い社会的場面を用いて、社交不安者の注意の偏りについて検討している。Perowne & Mansell (2002) は、実験参加者に複数の評価者の前でスピーチを行うことを求め、評価者が行ったうなずきや首を傾げるなどの動作にどの程度気づいたかによって、スピーチ中の他者注目の程度を測定した。また、The Focus of Attention Questionnaire (FAQ; Woody, 1996) を測定し、スピーチ中の自己注目の程度を測定した。その結果、ネガティブな動作の検出に関しては、社交不安者と低社交不安者に差が認められなかったが、スピーチ中の自己注目に関しては、社交不安者が低社交不安者よりも自己注目状態であった。このことから、自己注目によって不安が生じるとする Clark & Wells (1995) を支持している。河崎他 (2009) も、同様の手法を用いて、スピーチ中の社交不安者の注意の偏りについて検討を行った。その結果、スピーチ場面において、社交不安者は低社交不安者よりも高い自己注目を示した一方で、両者ともに評価者の中性的な動作より評価者のネガティブな動作を多く検出していた。この結果は、自己注目と他者注目によって不安が生じるとする Rapee & Heimberg (1997) を支持しているといえる。このように、社交不安者の注意の傾きについて実験的に検討した研究でも、Rapee & Heimberg (1997) のモデルと Clark & Wells (1995) のモデルのいずれが支持されるかは決着していない。

このような社交不安者における注意の偏りの不一致が認められる原因として、本研究では社交不安者のサブタイプに注目する。清水・川邊・海塚 (2007) は、対人恐怖心性と自己愛傾向の高低の組み合わせによって、誇大特性優位型 (以下、誇大型)・誇大 - 過敏特性両貧型 (以下、両貧型)・誇大 - 過敏特性両向型 (以下、両向型)・過敏特性優位型 (以下、過敏型)・中間型の5つのサブタイプを考案し、社交不安者を自己愛傾向が高い両向型と自己愛傾向が低い過敏型の2つのサブタイプに分類している。対人恐怖症は、社会的評価への懸念によって特徴づけられ、社交不安症の診断基準を満たしており、その人が他の人たちを不快にさせているという恐怖と関連する症状群である (American Psychiatric Association, 2014)。岡野 (1998) は、日本では、社交不安と対人恐怖はほぼ同概

念であると解釈している。そこで、本研究においても社交不安と対人恐怖は同概念として扱う。

清水・川邊・海塚 (2008) は、両向型と過敏型は心理的ストレス反応が全般的に高く、中間型は平均的、誇大型と両貧型が全体的に低く、サブタイプによってストレス反応の重症度が異なることを明らかにしている。また、清水・岡村 (2010) は、両向型と過敏型は、社交不安者に特徴的であるネガティブな反すう、統制不能、不合理な信念、自己関連づけといった認知特性に違いはないことを明らかにしている。このように、各サブタイプのストレス反応や認知特性の違いについて明らかになっているが、社交場面における注意の偏りに着目した研究はない。サブタイプによって、注意の偏りに違いがみられれば、Clark & Wells (1995) の主張と Rapee & Heimberg (1997) の主張は矛盾するものではなく、社交不安者のサブタイプによる違いを反映したものであるということを示すことが可能になる。また、近年、自己注目を修正することを目的とした注意シフトトレーニングや外的な脅威刺激に対する注意の偏りを修正することを目的とした注意バイアス修正トレーニングが考案されており(吉永・清水, 2016; Amir, Weber, Beard, Bomyea & Taylor, 2008), 社交不安症の治療においても注意の偏りに注目が集まっている。本研究によって、社交不安者と注意の偏りの関係についてさらに精緻に検討することで、それらのトレーニングの効果の向上などに寄与することが可能であると考えられる。

先行研究において、両向型のように強い対人恐怖と自己愛を持つ者は、治療中、治療者の反応に気にしやすいことや(岡田, 2003), 自分が傷つく可能性を察知すると、回避による自己防衛を行うこと(上地・宮下, 2004) が指摘されている。このことから、他者との交流において、他者の反応に対して敏感に反応するためもしくは自分が傷つくような反応や事象を察知するために、他者注目を行っている可能性がある。すなわち Rapee & Heimberg (1997) のモデルで予想されるタイプの社会不安者であると考えられる。一方、過敏型のように強い対人恐怖のみを持つ者は、自己の内面に対する関心が高いこと(岡田, 1993) が指摘されており、他者との相互作用場面において、自己注目を行っている可能性がある。これは Clark & Wells (1995) のモデルによる予想されるタイプの社会不安者である可能性がある。

これまで、社会的場面における社交不安者の注意の偏りについて検討した研究では、他者のしぐさなどを検出するように求める教示が結果に影響を与えた可能性がある。河崎他 (2009) と Perowne & Mansell (2002) は、評価者が存在するスピーチ場面において評価者が表出するしぐさの検出量を他者注目の指標として用いている。しかし、Clark & McManus (2002) は、外的情報を検出するように求められた場合に社交不安者は他者の脅威的なしぐさなど外的な脅威情報を検出しやすくなることを指摘している。そのため、河崎他 (2009) は、評価者のしぐさなどを検出するように求めた教示によって他者注目が促進されてしまった可能性を指摘している。そこで本研究は、そのような教示を行わずに他者注目を測定するために、他者注目が生じる場面と生じない場面でスピーチを行う。具体的には、評価者がスピーチを評価している動画の呈示の有無によって、スピーチ中の評価者を観察可能な場面(観察可能条件)と観察不可能な場面(観察不可能条件)を設定する。観察可能条件では、他者注目を行うことができるが、観察不可能条件では、他者注目を行うことができない。これら2つの条件間のスピーチ中の不安を比較することで、スピーチ中の他者注目と不安の関連性に

ついて、外的情報を検出するような教示を行わずに検討することが可能であると考えられる。

そこで、本研究は、社交不安者のサブタイプによって社会的場面の注意の偏りが異なるかどうかを検討することを目的とする。本研究の仮説として以下の4つを挙げる。

1. 両向型および過敏型は、低社交不安群よりもスピーチ中の自己注目が高い。
2. 両向型は、過敏型と低社交不安群よりもスピーチ中の他者注目が高い。
3. 過敏型は、観察可能条件でも観察不可能条件でも、低社交不安群よりもスピーチ中の状態不安が高い。
4. 両向型は、観察可能条件において、低社交不安群よりもスピーチ中の状態不安が高い。

方法

実験参加者 女子大学生 237 名 (平均年齢 18.97 歳 SD = 0.78) に対して対人恐怖心性 - 自己愛傾向 2 次元モデル尺度短縮版 (清水・川邊・海塚, 2006) への回答を求めた。清水他 (2007) を参考に各々の尺度合計得点の平均値から $\pm 0.5SD$ の範囲を中間型とし、尺度合計得点の高低で過敏型、誇大型、両向型、両貧型の 5 サブタイプに分類した。分類基準を Table 1 に示した。中間型を除く、過敏型、誇大型、両向型、両貧型に分類され、かつ実験参加の同意を得られた者の中から 40 名を実験参加者とした。実験に不備のあった 12 名を除き、過敏型 9 名、両向型 8 名、低社交不安群(誇大型・両貧型)12 名を分析対象者とした。

Table 1
対人恐怖心性 - 自己愛傾向2次元モデル尺度短縮版による分類基準

サブタイプ	分類基準
過敏特性優位型	対人恐怖心性領域が36.75点以上であり、同時に自己愛傾向領域が31.96点以下で、なおかつ中間型ではないもの
誇大特性優位型	対人恐怖心性領域が36.75点以下であり、同時に自己愛傾向領域が31.96点以上で、なおかつ中間型ではないもの
中間型	対人恐怖心性領域が32点から42点の範囲にあり、同時に自己愛傾向領域が27点から37点の範囲にあるもの
誇大 - 過敏特性両向型	対人恐怖心性領域が36.75点以上であり、同時に自己愛傾向領域が31.96点以上で、なおかつ中間型ではないもの
誇大 - 過敏特性両貧型	対人恐怖心性領域が36.75点以下であり、同時に自己愛傾向領域が31.96点以下で、なおかつ中間型ではないもの

実験デザイン サブタイプ (過敏型・両向型・低社交不安群) を参加者間要因、スピーチ状況 (観察可能・観察不可能) を参加者内要因とする 2 要因計画とした。

スピーチ課題 状態不安を喚起するために「評価者 4 名が隣室に待機しており、スピーチの様子が生体カメラを通して、評価者に中継されると教示し、1 分間のスピーチを行うことを求めた。実際に評価者は存在しなかった。スピーチテーマは、河崎他 (2009) と望月 (2015) を参考に自己関連度が高いと考えられる「学生時代一番頑張ったこと」と「友人には知られていない私の以外な一面について」とし、スピーチテーマを提示したのち、2 分間のスピーチの内容を考える時間を設けた。その際、「白い紙にメモを取りながらスピーチの内容を考えることができるが、スピーチを行う際

はこの紙を見ることはできない」と教示した。その後、1分間のスピーチを行うことを求めた。

評価者映像 4名の女性モデルが“うなずき”“顔を横に向ける”といった動作を表出した映像を作成し、観察可能条件において、モニタに呈示した。映像は、モニタを4分割し、4人の評価者の姿が同時に映し出されるように編集を行った。

測度 スピーチ中の注意の偏りを測定するために、The Focus of Attention Questionnaire (FAQ; Woody, 1996) を日本語に翻訳して使用した。本尺度は、「自分がどのくらい不安を感じているのかが気になった」など自己の身体感覚などへの注意を測定する自己注目に関する項目が5項目、「評価者の様子や服装が気になった」など他者の表情やしぐさなどへの注意を測定する他者注目に関する項目が5項目の計10項目からなり、それぞれの項目に対して、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」の5件法で回答を求めた。

スピーチ課題による主観的不安反応の高まりを測定するために、State-Trait Anxiety Inventory 日本語版(清水・今栄, 1981) の A - State を使用した。本尺度は20項目からなり、それぞれの項目に対して、「全くそうでない」から「全くそうである」の4件法で回答を求めた。スピーチ課題による客観的不安反応の高まりを測定するために、皮膚電気反応(以下、GSR)と心電図の測定を行った。GSRは、電極を非利き手側の第2指・第3指掌面に装着し、心電図は、電極を非利き手側の手首と両足首に装着する第Ⅲ誘導により測定を行った。これらの測度は、実験中連続的に測定され、心電図は、測定した心電図からRR間隔を算出した。状態不安が高まると、安静状態と比較して、GSRは増加し、RR間隔は短くなる。GSRとRR間隔は、ベース(3分間)、観察可能条件でのスピーチ(1分間)、観察不可能条件でのスピーチ(1分間)の3つの測定区間をすべて30秒ごとに区切り、各測定区間の測定開始後30秒間の平均値を用いた。

装置 参加者がスピーチ課題を行っている様子の録画するために、SONY製ビデオカメラFDR-AX100を使用した。しかし、実際に録画は行わなかった。SONY製カラーテレビKJ-48w700cとSONY製パーソナルコンピュータSVT131A11NをHDMIケーブルで接続し、評価者がスピーチを評価している様子を録画した映像を呈示した。GSRと心電図の測定には、ADInstruments製生理アンプPowerLab PL 3508を用いて、サンプリング周波数100kHzで測定を行った。GSRと心電図の分析は、LENOVO製パーソナルコンピュータG50-80上でADInstruments製解析ソフトLabChartを用いて行った。

手続き 281cm×207cm×218cmのシールドルーム内で個別に実験を実施した。実験参加者が入室後、モニタの120cm前に着席させ、実験についての説明を行い、実験参加の同意を得た。その後、GSRと心電図の測定のための電極を装着した。GSRと心電図の数値が落ち着いたことが確認されたのち、ベースの状態不安を測定するために、GSRと心電図の測定(3分間)とA - Stateに回答を求めた。その後、モニタに事前に作成した評価者がスピーチを評価している様子の映像が呈示される観察可能条件と呈示されない観察不可能条件において、スピーチ課題を行った。各条件の順序は、カウンターバランスを取り、参加者間でランダムになるようにした。各スピーチ終了後、A - Stateに回答を求めた。観察可能条件では、A - Stateに加えて、FAQにも回答を求めた。最後に、必要最低限のディブリーフィングを行った。

分析 注意の偏り得点については、サブタイプ（過敏型・両向型・低社交不安群）の1要因の分散分析を行い、不安反応得点については、サブタイプ（過敏型・両向型・低社交不安群）×条件（観察可能・観察不可能）の2要因分散分析を行った。

倫理的配慮 実験開始前に、実験の目的や個人情報保護について口頭および書面にて説明を行った。また、実験参加者に「実験は途中で辞めることができること」を伝え、参加が強制ではないことを伝えた。

結果

スピーチ中の注意の偏りの検討

サブタイプによってスピーチ中の注意の偏りが異なるのか検討するため、観察可能条件の他者注目得点と自己注目得点の平均得点に対して、サブタイプ（過敏型・両向型・低社交不安群）の1要因分散分析を行った。その結果を Figure 1 に示す。分析の結果、自己注目得点においても他者注目得点においてもサブタイプによって違いは認められなかった ($F(2,25) = .43, ns$; $F(2,25) = 1.35, ns$)。

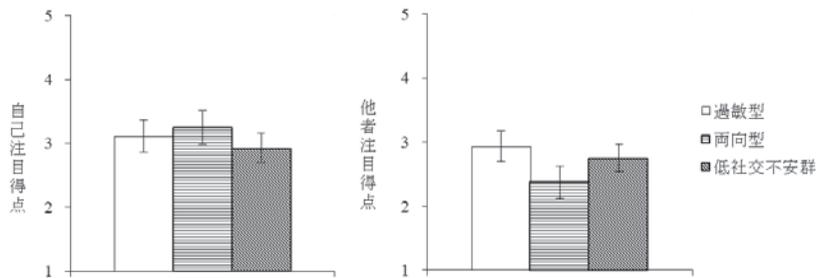


Figure 1. 観察可能条件における自己注目得点と他者注目得点（エラーバーは標準誤差）。

スピーチ中の状態不安の検討

まず、観察可能条件および観察不可能条件において、サブタイプによって主観的不安反応の高まりが異なるのか検討するため、観察可能条件と観察不可能条件の A - State の平均得点に対して、サブタイプ（過敏型・両向型・低社交不安群）×条件（観察可能・観察不可能）の2要因分散分析を行った。分析の結果を Figure 2 に示す。分析の結果、まず、A - State の平均得点について、条件の主効果が認められ ($F(2,50) = 22.48, p < .01$)、ベースよりも観察可能条件、ベースよりも観察不可能条件、観察不可能条件よりも観察可能条件において主観的不安反応が高かった ($ps < .05$)。

次に、観察可能条件および観察不可能条件において、サブタイプによって客観的不安反応の高まりが異なるのか検討するため、観察可能条件と観察不可能条件の GSR と RR 間隔の平均値に対して、サブタイプ（過敏型・両向型・低社交不安群）×条件（観察可能・観察不可能）の2要因分散分析を行った。分析の結果を Figure 2 に示す。分析の結果、GSR の平均値と RR 間隔の平均値において、条件の主効果が認められ ($F(2,50) = 84.72, p < .01$; $F(2,50) = 106.82, p < .01$)、ベースよりも観察可能条件、ベースよりも観察不可能条件、観察不可能条件よりも観察可能条件において GSR が増加し、RR 間隔が短かった ($ps < .05$)。

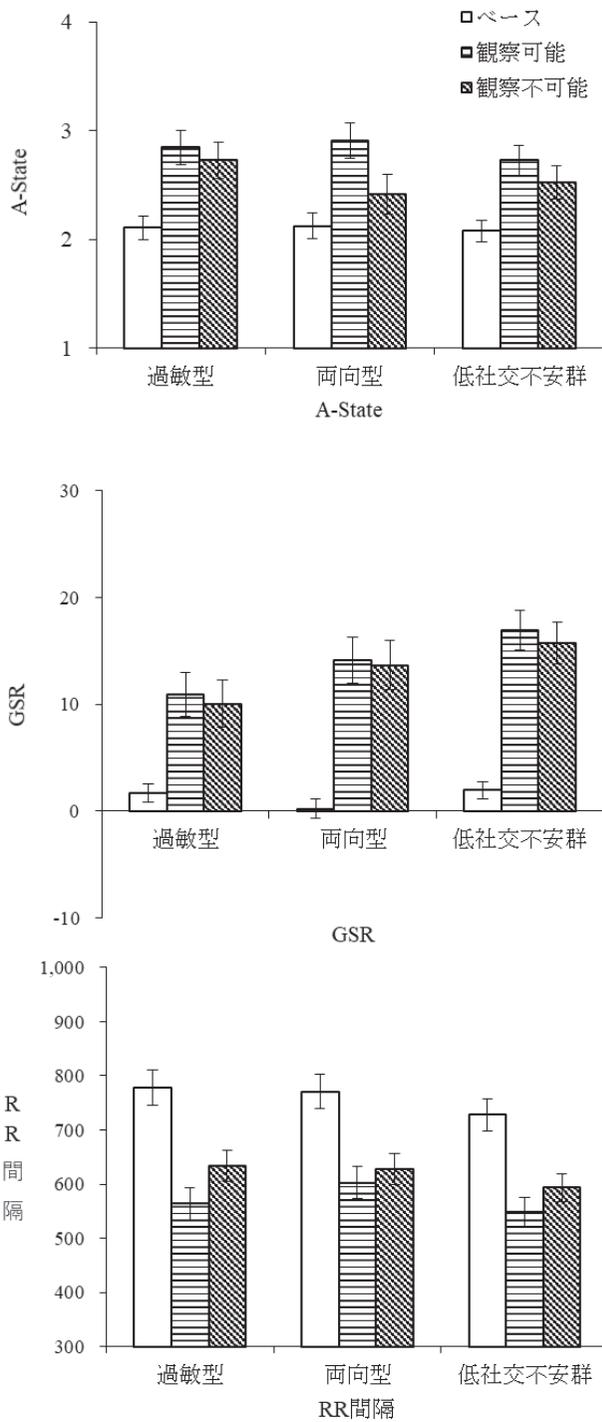


Figure 2. スピーチ中の主観的不安反応と客観的不安反応 (エラーバーは標準誤差)。

考 察

本研究の目的は、社交不安者のサブタイプによって社会的場面の注意の偏りが異なるかどうかを検討することであった。本研究の結果より、スピーチ場面における注意の偏りに社交不安のサブタイプによる違いはなかった。スピーチ場面における主観的不安反応と客観的不安反応は、他者を観察することができないスピーチ場面より他者を観察することができるスピーチ場面のほうが高かったが、社交不安のサブタイプによる違いはなかった。サブタイプによって、社会的場面の注意の偏りが異なると予想されたが、社交場面における注意の偏りに社交不安のサブタイプによる違いは認められなかった。

本研究の結果から、社交不安者は社会的場面に直面した時、社交不安者は、社交不安者は、心拍数の高まりなど自身の身体感覚や他者からどのように自分自身が見えているのか他者の視点から自分自身を観察することに注意を向けるのと同時に、他者のしぐさや表情などに否定的な反応にも注意を向けており、自己注目と他者注目状態になる可能性がある。社交不安者は、低社交不安者と同程度の生理的反応が生じていたとしても、生理的反応を実際に生じているよりも過剰に認知することで生理的反応自体が脅威刺激となり、不安が維持することや(金井, 2008)、肯定的とも否定的ともとれる他者に行動をより否定的に解釈すること(金井・笹川・陳・嶋田・坂野, 2007)が指摘されており、生理的反応や他者の表情といった情報が、より脅威的に判断されることによって、不安が高められると考えられる。

自己注目のみが生じると予想された過敏型は、社会的場面において、両向型と同様に自己注目と他者注目が生じていた。辻(1993)は、注意を1つの対象に集中しつづけることは困難であり、注意は切りかわるものであると述べている。そのため、過敏型は、注意の1つの対象に集中しつづけることが困難であるという注意の特徴によって、自己注目と他者注目が生じている可能性がある。しかし、自分を有能であると認識しているといった特徴を持つ両向型にとっては、評価者のしぐさや表情といった他者注目を行うことで得られる情報は脅威的な情報であり、そのような脅威的な情報を得ることによって不安が生じていると考えられる。対して、人から注目されたいという欲求が少なく、自己に対する肯定的な感覚の低さから自分自身に対して不安を感じたり、他者に対して緊張している状態である過敏型(清水・海塚, 2002)にとって、評価者のしぐさや表情といった情報は、脅威的な情報ではない可能性がある。そのため、過敏型は、他者注目状態になるが、他者注目に得られた情報によって不安が高まらない可能性がある。このように、サブタイプごとに注意を向けた対象から得られる情報が持つ意味は異なる可能性があり、過敏型では自己注目と他者注目が生じるものの、不安に関連しているのは自己注目によって得られる情報のみである可能性がある。そのため、社交不安者のサブタイプごとに対象から得られた情報と不安の関係性について検討を行う必要がある。

また、本実験の結果から、社会的状況における注意は一定ではなく切り替わる能性があることが明らかとなった。そのため、自己注目と他者注目の指標として、注意の切り替わりを測定することができる指標を測定する必要がある。富田(2018)は、社交不安者のスピーチ課題中の脳活動や視線の動きを用いて、自己注目と他者注目を測定することができる客観的な指標の開発している。脳

活動や視線の動きは継時的に測定可能な指標であるため、社会的状況における社交不安者の注意の切り替わりを測定することが可能である可能性がある。今後は、社会的状況において、脳活動や視線の動きなど経時的に測定可能な指標を用いて、社交的状況における社交不安者の注意の偏りと不安の関係性について継時的に検討する必要があると考えられる。

社交不安症への治療効果が示されている認知行動療法では、自己注目を軽減することを目的とし、自己に向いている注意を外部に向ける練習を行う注意シフトトレーニングが取り入れられている(吉永・清水, 2016)。社交不安症が改善すると、自己注目が減少することが示されており(Hofmann, 2000)、社交不安症の治療には、注意シフトトレーニングを行い、自己注目を減少させることが有効である可能性がある。また、Amir, Weber, Beard, Bomyea & Taylor (2008) は、社交不安者に対して他者の怒り顔といった外的な脅威刺激に対して引き付けられる注意を修正することを目的とする注意バイアス修正トレーニングを行わせ、外的な脅威刺激に対して引き付けられる注意および社交不安が減少することを明らかにしている。そのため、社交不安症の治療では、注意バイアス修正トレーニングを行い、外的な脅威刺激に対して引き付けられる注意を修正することも有効である可能性がある。これまで、この2つのトレーニングは別々に効果が検討されることが多かった。しかし、本実験で得られたように、社交不安者は社会的場面に直面した時、自己注目と他者注目を切り替えているのであれば、自己注目と他者注目の両方を減少させることが効果的である可能性がある。そのため、今後は、注意シフトトレーニングと注意バイアス修正トレーニングを組み合わせを行った場合の治療効果などの検討が求められる。

引用文献

- American Psychiatric Association(2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (5th ed.). Washington, DC: American Psychiatric Association.
- (アメリカ精神医学会 高橋 三郎・大野 裕(監訳)(2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- Amir, N., Weber, G., Beard, C., Bomyea, J., & Taylor, C. T. (2008). The effect of a single-session attention modification program on response to a public-speaking challenge in socially anxious individuals. *Journal of abnormal psychology, 117*(4), 860.
- Clark, D. M., & McManus, F. (2002). Information processing in social phobia. *Biological psychiatry, 51*(1), 92-100.
- Clark, D. M., & Wells, A. (1995). A cognitive model of social phobia. (Heimberg, R. G., Liebowitz, M. R., & Hope, D. A. et al. (Eds), *Social phobia: Diagnosis, assessment, and treatment*, New York: Guilford press.)
- Hofmann, S. G. (2000). Self-focused attention before and after treatment of social phobia. *Behaviour research and Therapy, 38*(7), 717-725.
- 上地 雄一郎・宮下 一博 (2004). もろい青少年の心——自己愛の障害—— 北大路書房
- 金井嘉宏 (2008). 社会不安障害患者の生理的反応に対する認知の歪みに関する研究 風間書房

- 金井 嘉宏・笹川 智子・陳 峻雲・嶋田 洋徳・坂野 雄二 (2007). 社会不安障害傾向者と対人恐怖症傾向者における他者のあいまいな行動に対する解釈バイアス 行動療法研究, 33(2), 97-110.
- 河崎 千枝・高島 佳奈・岩永 誠 (2009). 社会的場面とその予期における対人不安者の注意処理 行動療法研究, 35(3), 205-216.
- 望月 聡 (2015). 自己開示的スピーチ課題における社交不安者の心理的反応と生理的反応 筑波大学心理学研究, 49, 67-75.
- 岡田 暁宜 (2003). 過敏な自己愛者に対する精神分析的精神療法: 逆転移の視点から 精神分析研究, 47(4), 476-48.
- 岡田 努 (1993). 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, 4(2), 162-170.
- 岡野 憲一郎 (1998). 恥と自己愛の精神分析 対人恐怖から差別論まで 岩崎学術出版社
- Perowne, S., & Mansell, W. (2002). Social anxiety, self-focused attention, and the discrimination of negative, neutral and positive audience members by their non-verbal behaviours. *Behavioural and cognitive Psychotherapy*, 30(1), 11-23.
- Rapee, R. M., & Heimberg, R. G. (1997). A cognitive-behavioral model of anxiety in social phobia. *Behaviour research and therapy*, 35(8), 741-756.
- 清水 秀美・今栄 国晴 (1981). STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版 (大学生用) の作成 教育心理学研究, 29(4), 348-353.
- 清水 健司・川邊 浩史・海塚 敏郎 (2006). 対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデル尺度における短縮版作成の試み パーソナリティ研究, 15(1), 67-70.
- 清水 健司・川邊 浩史・海塚 敏郎 (2007). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の相互関係について 心理学研究, 78(1), 9-16.
- 清水 健司・川邊 浩史・海塚 敏郎 (2008). 対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連 パーソナリティ研究, 16(3), 350-362.
- 清水 健司・岡村 寿代 (2010). 対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデルにおける認知特性の検討 教育心理学研究, 58(1), 23-33.
- 清水 健司・海塚 敏郎 (2002). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, 50(1), 54-64.
- 富田 望 (2018). 社交不安における自己注目と注意バイアスの統一的理解 早稲田大学審査学位論文 (未公刊)
- 辻 平治郎 (1993). 自己意識と他者意識 北大路書房
- Woody, S. R. (1996). Effects of focus of attention on anxiety levels and social performance of individuals with social phobia. *Journal of abnormal psychology*, 105(1), 61.
- 吉永 尚紀・清水 栄司 (2016). 社交不安障害(社交不安症)の認知行動療法マニュアル(治療者用) 不安症研究, 7, 42-93.